BOOM -ING

Dear Musicians

イタリアンファッションの大立物、『ミラノの帝王』と呼ばれるとっぴにカッコイイ！デザイナーに、ベストセラーリストにいつも名をつらねる人気の日本の作家がインタビューをしている記事を読んだ。作家はこう書いている。

会う前、妙に緊張してしまった。リラックスするために、たかが洋服屋じゃないか、と自分に言い聞かせたが効果がなかった。「たかが洋服屋」でないことをわたしのからだが知っていたからである。

そして切り出しの言葉にこうあった。

「よくこうやってインタビューしたり、海外で食事したり、パーティに出席したりしますが、その時にひとりで行くことが多いんです。すごく緊張しますが、《ブランド名》のスーツを着ていくとすごくリラックスできるんですよ。リラックスできるというか、デザインも素材もソフトで軽く着やすいにも拘らず、なんだか強いものに守られているような、それも昔の騎士が鎧を着るのではなく、軽やかな天使に守られているような気になるんです。」

とある。作家は、心からそのブランドを敬愛する言葉でインプレッションを伝えた。

その言葉を受けてデザイナーは答える。

「そんなにシリアスにほめていただいて！」と謙遜しつつ、次の言葉が鋭い。さすがである。目にもとまらぬ電撃の一発。

「私の服がそこまでのクォリティを得ているとすれば嬉しいですね。」

"クォリティ"と言ったのである。"クォリティ"。イタリアのミラノあたりのクォリティ観とは、まさしく、このレベルで語られるのである。まさに、これを目指して作っている。解説すれば、「よい服」とは、「着る人の人生をリラックスさせ、勇気づける」ものでなければならない。それがクォリティのランキングを決定するのである。ということになる。

IBANEZ '91ラインナップのライナーノーツに記すにはいささか異質なジャンルの話が飛び出してしまったと思われるかもしれないが、実は、アイバニーズがいつも標榜している楽器の"クォリティ観"をそのままうつし絵のように世界のもうひとつのカッコイイ方面でのエピソードで出会ったのですっかり舞い上がってしまったという次第。そうなんだよな、わかりにくいけどこれなんだよな、やっぱり……と自画自賛。話をもどして、良い楽器とは、になるのだがもう話し終ってしまった。簡単に言えば、きみが良いと思ったものは"良い楽器"なのだ。手に入れた楽器がきみをリラックスさせるのであれば、それは"よりよい楽器"にステップアップする。きみの人生を守ってくれるような気がしてくるような楽器は"凄い楽器"なのである。

スティーヴやポール、フランク、ジョー、レブ、そして、ジョージたちは多分、多分だよ、そんなようなことでアイバニーズとともに生きているのでありましょう。かつて85年版のラインナップ紹介のパンフレットに「黄金のまま ぼくは生きる」というタイトルを冠せた。アイバニーズのクォリティアップへのスローガンとしてである。そして、6つの合言葉でそれをインパクトした。'91ヴァージョンには、あなたにそれを贈りたい。それぞれをシリーズのとびらに。アイバニーズからあなたへ。

NOV. 1990

OUT!